
寄稿



寄稿

池村紘一郎先生を偲んで

社会医療法人義順顕彰会 会長 田上 容正

池村先生は昭和16年2月8日種子島に誕生されています。

榕城小学校、榕城中学校、種子島高等学校を卒業され昭和44年3月、熊本大学医学部を卒業されました。因に私が郷里に帰り、田上容正内科として開業したのも昭和44年のことで、あれから52年が経ちました。

池村先生は熊本大学医学部を卒業され、その後まだインターン制度があり、何処でインターンをされたか解りませんが、1年のインターンを終え医師国家試験に合格され、すぐに鹿児島大学病院皮膚泌尿器に入局されました。

そのあと医局関連の各地の病院で研鑽を積み、平成3年1月、南種子町上中で開院されました。腎臓が専門で腎疾患の中でも当時、不治とされた慢性腎不全の患者のため人工透析を中心に診療を始められました。私もそうでしたが、種子島の医療は専門医制度など関係なく、皮膚科や内科、その他来院される患者さんは決して断ることもなく全て診て居られたと思います。

手に負えない患者さんはヘリコプターを依頼し、鹿児島島の病院に送って居られました。開院されてから丁度20年後の平成23年3月に、体調をくずされ閉院されました。糖尿病があり視力が衰えたため昼夜を分かつたぬ激務に耐えられなくなったためです。

閉院と同時に平成23年4月より田上病院(現在の種子島医療センター)に勤務して下さることになり、皮膚科、泌尿器を中心に診療して下さいました。続いて平成30年2月からは介護老人保健施設わらび苑の施設長として勤務していただき、また種子島医療センターの理事も務めて下さり、南種子で開業中は熊毛地区医師会の理事もされ医師会活動にも熱心に従事されました。

令和3年11月、視力障害など体調不良のため、わらび苑を退職され、熊毛地区医師会も退会されました。その後、自宅で静養の傍ら鹿児島島の病院を受診されていたようですが、令和4年3月3日他界されました。私より5才年下で熊本大学の後輩でもありましたので、いつも親しくして下さい、性格は温厚で静かな振舞い、決して怒ることなどなく、大きな声など発せられないとても謙虚な先生でありました。

「医師は生命を尊重し、人の健康を守るために自己の知識と良心を捧げるべきである。」とは鹿児島県医師会医道倫理綱領にある言葉ですが、池村紘一郎先生はまさにこの言葉を自ら実践され、種子島の患者さんのために一生を捧げられたのであります。

いつもにこにこした笑顔で患者さんを診療されるお姿が目につかぶようですが、どうして先輩の私より先に逝くなんてと悔やまれてなりません。

私は池村紘一郎先生の御逝去を心から悼み、哀悼の誠を捧げたいと思います。

種子島医療センターとの20年を振り返り

鹿児島大学医学部保健学科 教授 根路銘 安仁

私は種子島医療センターに2002年7月に赴任したので、本号が出た頃には在籍20年となります。1995年に種子島医療センターに初めての小児科常勤医として小児科部長として島子敦史先生が赴任されて、その後、江藤豪先生、吉留幸一先生、武明子先生と続いた勤務でした。

赴任時の20年前は、小児科部長とはいっても島に小児科専門医は一人で、心細い思いをしていて、その時に相談先としてメーリングリストを立ち上げましたが、現在では鹿児島県小児医療関係医師の多くが参加するものになっています。赴任後1年経過したころに当時の小児科教授の河野嘉文先生が児玉祐一先生を派遣してくださり2人体制になりました。そのお陰で、病院での治療だけでなく小児保健活動もできるようになりました。児玉先生の後、藤山りか先生が来てくださり、しばらく一緒に働かせてもらいました後、私は2005年3月に藤山先生に部長職をお願いして大学へ異動しました。2年9か月と短い赴任でしたが充実した医師生活を送らせていただきました。

その後、途中中断したこともありましたが、種子島医療センターのご厚意で、現在も月に1度、小児科外来に診療に来させていただいております。2017年4月に南種子出身の岩元二郎先生が小児科部長として赴任され、小児科医3人体制になりました。福岡の飯塚病院で活躍されていたように、種子島でも子育て支援で安全安心の子育て環境を、医療・行政・福祉が密に連携していける体制を推進されています。

また、人的余裕もできたため、大学から赴任された先生方も専門性を活かして専門外来を開設されています。私が赴任していた頃は鹿児島県内でも予防接種率など他の地域に追いつくのが目標でしたが、現在種子島は非常に充実した小児医療体制が実現されており、他の地域から目標とされる地域医療が展開されていると思います。このような手厚い小児医療体制を維持できるのも、種子島医療センターの田上寛容理事長、高尾尊身院長のご理解があったことと感謝申し上げます。

私は、種子島医療センターで育てられて、現在鹿児島大学医学部保健学科で看護師・理学療法士・作業療法士の教育に携わっています。私が赴任中に診察していた子供たちが、入学して来ています。カルテ等で名前に覚えがあるものの、本人を見ても思い出せませんが、種子島のことなどを講義で話すと親御さんに報告してくれて懐かしいコメントをいただき嬉しくなることがあります。

また、ぜひ私のように種子島のファンになって欲しくて、学生の医療実習を、種子島医療センターを中心に受け入れてもらっています。今後、種子島の地で専門職となった教え子にお会いできることを期待したいと思います。もうしばらく、種子島医療センターにお世話にならせていただければと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。

限界突破

鹿児島大学医歯学総合研究科小児科学分野 教授 岡本 康裕

2021年4月から、2か月に1回の小児科の専門外来(血液外来)でお世話になっております。先日ある会議で、「私たちは下りエスカレーターを登ろうとしているようなもの」という話を聞きました。常に登っていないと、立ち止まっているだけでは、どんどん下に下がるという話です。怖い話だと思うのと同時に、真実だと思いました。何か新しいことに興味を持ち、実際に取り入れる態度、習慣が大切だと思います。

私は、2021年4月に鹿児島大学小児科の教授に昇任しました。その時に、スタッフのコミュニケーションを良くする方法を模索して、Slackを医局内の公式ツールとして導入しました。Slackとはチームコミュニケーションツールで、"Searchable Log of All Conversation and Knowledge"のアクロニムです。

Slackについては、雑誌やwebで時々見聞きしていたものの、その正体は何なのかははっきりと理解しておらず、なんだか便利なものらしいという認識でした。大学小児科医局のIT担当の丸山慎介君に導入を検討してもらいました。若い人は、すでに使ったことがある人もいました。初期には、使い方に戸惑うことがありましたが、みんながすぐに慣れ、今では欠かせない日常アプリになっています。

新しいことに興味を持ち、取り入れる態度は、医療そのものにも当てはまります。若い頃に読んだ本に「生の紡錘形理論」というものが書かれていました。生まれた時には誰も知らない。人生が進むとともに知り合いが増え、関係する人間が増えて行きますが、また人生の終盤に向かって、関係者の数が萎んでゆき、最後は一人になります。

医師としての知識や経験も、この紡錘形理論に合致していると思います。研修医の最初は何も知りません。(ただし今日では、医学教育と切れ目のない卒業教育が行われるため、研修医は実際にはたくさんを既に学んでいます。)一医師としての知識と経験がどこかでピークを迎え、その後は新しい治療、新しい薬剤、新しい検査に対して躊躇する思いが芽生え、立ち止まることになり、やがて萎んでいく。

とはいえ、医療においては、紡錘形が理想というわけではありません。ピークを早く迎えないようにするべきですし、ピークだと思ってもさらにその先へ行く、そういう日々の積み重ねが必要でしょう。飛魚には「限界突破」のイメージが重ねられているかも知れません。下りエレベーターで立ち止まるのではなく、水面から飛び出して、飛んでゆこうとするイメージです。

最後になりましたが、地域の皆様の役にたてるように人的交流を通じて、地域の小児医療に貢献したいと考えます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

治水神社に献茶

内科診療科医長 島田 紘一

鹿児島・岐阜姉妹県盟約50周年記念式典が開催されたという記事が新聞に掲載された。令和4年4月25日の南日本新聞である。姉妹県盟約を結んだのが、1971年と記されている。

飛魚への原稿寄稿の依頼を受けていたが、書くテーマも無いので辞退しようかと思っているとところだった。治水神社に献茶をしたことを思い出した。昭和46年(1971年)4月3日のことである。

ある学会の帰りに治水神社に寄り献茶をした。裏千家鹿児島支部の幹事長をしておられた薩摩陶器社長の宮内様から白薩摩焼茶碗を1個戴き、治水神社の御霊に茶一服を捧げた。治水神社の神官も喜んでくれた。茶碗は寄贈した。

数か月後、国分から交流の団体が治水神社に詣でた。その時、神官が私のことを語ったのだろう。国分市の助役をしていた父も参加していたのだが、父は息子の私が献茶をしたことを初めて知り、「鼻が高かった」と語ってくれた。初めての親孝行だったのかもしれない。

荒れ狂う揖斐川、長良川、木曾川の治水の難工事を、江戸幕府は薩摩藩に命じた。1754年(宝暦4年)平田鞠負を総奉行に千余名の藩士らが難工事に取り組んだ。距離にして112km、期間1年3ヶ月、費用は現在の額で300億円。幕府側の妨害工作があり、憤死、抗議の切腹、病死などが多かった。平田鞠負も工事の完成を見届けて切腹した。藩主重年も病死した。

幕府はそれ以前に諸藩に16回もお手伝普請を命じていたが、効果なく氾濫していた。

鹿児島に供養塔が出来たのは、1920年で、治水神社が建立されたのは、私が生まれる2年前で、1938年のことだ。

時は過ぎ、令和3年7月23日より9月26日まで、岐阜県博物館で「薩摩の陶と刀」という展示会が開催された。盟約記念式典の一連の行事なのだろう。この中に、私の秘蔵の茶碗が展示されていた。

現在、黎明館に寄託しているが、薩摩御判手 江戸時代初期「白釉茶碗 銘すはま」である。これも何かの縁だろう。

種子島医療センターでの地域枠実務研修を振り返り

地域枠実務研修 医師 日高 敬文

地域枠実務研修として赴任し、早くも1年が経とうとしています。振り返りますと、離島医療はやりがいがとても大きいということを実感できた、充実した日々でした。

当院は、種子島の地域医療において大きな役割を担っています。その中で救急医療から一般医療まで幅広く経験させていただきました。患者様・ご家族と良く話し合うことを心掛け、一人ひとりにあった最適な治療を模索する毎日でした。

治療に難渋する場合もありましたが、種子島の患者様、ご家族様は自分や家族のことをとても尊重されており、共に一生懸命に悩んで、治療方針を考えてくださいました。診療中のやり取りでは、患者様の仕事や暮らしぶりについて、夢や頑張っていること等、いろいろなお話を聞かせていただきました。どの話も、如何に頑張っただけで生きて来られたかが押し量られ、胸が熱くなる話ばかりで、医師としてはまだ半人前にすらなれていない私ですが、最善の医療を追求しようとの思いを強めた次第でした。

また、当院には、海外の病院や大学病院で最先端医療を中心的立場で牽引して来られた病院長をリーダーに、高度な専門スキルを備えた医師や、専門資格をもった職員が多数在籍しています。島内で、ここまで高度な検査・治療ができる医療体制が構築されていることに驚きつつ、そのような環境で仕事ができ、刺激を受け、成長ができたことを喜ばしく思います。

認定看護師さんも多く、彼、彼女たちからは、医療に対するプロ意識をたくさん見せていただきました。話すときそれぞれが医療に対する熱い思いを持っており、いつも学ぶことが多いです。自分の住む地域にこのような医療施設があることを、島民の皆様は大いに誇れると思います。

種子島は海がきれいで、気候は温暖、食べ物はおいしく、人々は思いやりがある方ばかりです。そのような素敵な環境で、島民の皆様が安心して暮らせるよう、種子島医療センターはこれまで同様、これからも大いに貢献されていくと思います。

昨今のコロナ禍は予想以上に苦しいものですが、当院であれば必ずや乗り越えられると確信しております。私の1年間の種子島生活を、とても実りの多い日々にしてくださった皆様に、心よりお礼を申し上げます。誠にありがとうございました。これからも日々精進していきたいと思っております。

飛魚に寄せて

外科医師 富田 実代

2021年10月から2022年3月までの間、種子島医療センターで外科医として勤務させていただきました。慣れない環境で、諸先生方やコメディカルの皆さんに助けをもらいながら、何とか半年間の勤務を終えることができましたことを、こちらの病院に携わるすべての方々にこの場をお借りして心から感謝を申し上げたいと思います。

病棟の看護師さん、助手さん、外来の看護師さん、手術室の看護師さん、化学療法室の看護師さん、薬剤部の先生方、リハビリ室のスタッフの皆さん、地域連携室、訪問看護のスタッフの皆さん、画像検査や血液検査、内視鏡室の方々、人工呼吸器やCARTでお世話になったMEさん達、事務室の方々や食堂のスタッフの方々、清掃の方々、その他病院関係者の皆様、どうも有難うございました。

秋から春にかけての勤務ということもあり、離島特有のハブヤムカデなどの動物咬傷の治療に遭遇することはありませんでした。しかし、離島の中核病院として、日当直やトリアージ担当の時には、専門である消化器外科の範疇を越えた疾患、例えば交通外傷や頭部外傷、自然気胸、脳出血、心筋梗塞、熱傷やアナフィラキシーショック、鼻出血、小児の熱性痙攣など、様々な患者様の治療にあたることができ、大変貴重な経験となりました。

一方で、救急搬送件数は意外に少なく、島の皆さんは日頃から体調管理に留意しながら穏やかに過ごされているのだと実感しました。

外科医としては、他の関連病院と比較して手術件数やそれに伴う周術期管理症例数は少ないのですが、肝胆膵、胃の手術など高難度手術も行っており、離島の限られた資源の中でも取り組み方によってはそれらの手術も可能であるのだと、大変勉強になりました。

赴任する前は、初めての離島暮らしであり、知っている先生も一人もいない環境下でやっていけるか不安でしたが、無事に過ごせて良かったです。いつか、種子島医療センターの関係者の皆さん、島の皆さんに、医療従事者として世の中に貢献することで恩返しできればと、今後外科医として働いていく上での大きな励みとなりました。

コロナ禍にありますますが、皆さんの健康と暮らしが今後も守られ、種子島が繁栄していくことを心よりお祈り申し上げます。有難うございました。

離島医療との融合で新たな診療看護師の形を

副看護部長・診療看護師 竹之内 卓

4月に入職し、副看護部長を拝命いたしました。よろしくお願ひ申し上げます。出身は鹿児島市で、妻子と初めて種子島に移住してまいりました。

私は看護師の資格を取得して以来、鹿児島大学病院で勤務しており、外科病棟やICU、救命救急センターを歴任して参りました。その中で看護師の役割拡大に関心を持ち、当時開設されたばかりの看護師特定行為研修を受講し、その後、研修指導も行っておりました。特定行為研修の中で、当院の看護師の方々が毎年受講されており、種子島医療センターは、看護師のスキルアップや新しい制度への参入にご尽力下さる施設なんだな、と感じたことが印象に残っています。

その後、知識を付け様々な医療現場を経験する中で、患者さんをより包括的に全体像を捉え考察する広い視点が自分には不足していると感じ、診療看護師を目指し大学院に進学致しました。

診療看護師は、今後我が国が超高齢化社会を迎え、社会構造・体制が劇的に変化することが予想される2025年問題に対処すべく、海外のナース・プラクティショナー制度を参考に作られた資格です。看護師が医師やその他の医療職と協力・連携して、ある程度自律した医療提供を担う役割を持っています。その中には、国の認可を受けた教育課程を修了した看護師が、医師の医療行為の一部を医師に代わって実施する「看護師の特定行為」も含まれております。法律に定められている特定行為は38行為に及び、現在も看護師の業務の拡大に向け、医療行為の追加が検討されています。患者さんに一番近い医療職といわれている看護師が、医師と業務を共有するタスクシェアや、業務の一部を肩代わりするタスクシフトを試みることで、患者さんにとってより効率よく医療を受けられる効果や、医療がより身近になる効果、医師の業務負担軽減、看護師や他の医療職の業務効率化といった効果が見込まれています。

鹿児島県の離島・へき地は都市部に比べ、高齢化がより早く進行することは容易に想像できます。まだ数か月しか勤務しておりませんが、離島医療において様々な機能を備えた当院の役割は非常に重大であると感じています。その中で、当院のスタッフは、一人ひとりが現状でのベストを考えて判断・行動する能力や、医療を遂行する技術が高い、というのが印象であり、離島での医療資源や環境の面から、各々の判断や技術が重要であることが伺えました。

診療看護師の教育課程では、総合病院における診療場面だけでなく、地域に密着したクリニックやご自宅を訪問する訪問診療、老人保健施設における入所者の方々の健康管理など、様々な医療現場を経験して参りました。

離島医療と診療看護師の融合で、新たな診療看護師の形を見出し、微力ではありますが、島の医療や人々の医療に対する安心に繋がるよう努めて参る所存です。今後学んできたことを充分に発揮できるよう尽力いたしますので、皆さまのお力添えをよろしくお願い申し上げます。

令和2年度、3年度鹿児島県医師会長賞(看護業務功労)受賞に寄せて

看護部長 戸川 英子

令和2年度受賞者 看護局長 山口智代子、中材手術室長 田上義生

令和3年度受賞者 外来看護師長兼部長補佐 園田 満治、外来看護師 大谷 清美



山口さん(左)と田上さん



田上理事長と園田さん(左)



大谷さん

看護局長 山口智代子 令和3年2月退職

「長きにわたり看護職を続けることが出来ましたのも、上司や諸先輩、そして一緒に悩み、喜び、支えてくださった素敵な仲間と恵まれた環境で働く事が出来たおかげであり、皆さまへの感謝の気持ちで一杯です。今後も初心を忘れることなく「しあわせの島、しあわせの医療」を目指し、微力ではありますが努めてまいります。有難うございました。」

当院の正看護師が10人に満たない頃に就職され、可愛らしい20代の看護師長さんでした。40代からは当法人看護部のトップリーダーとして種子島の医療看護の質向上に尽力してこられました。患者さんはもとより職員に対しても常に笑顔を持って冷静にやさしく時には厳しく諭しながら接する後姿を見て看護管理者のあるべき姿を学んだ職員も多いと思います。この功績が認められての受賞を心からお喜び申し上げます。

中材手術室長 田上義生

「看護功労賞を賜り、誠にありがとうございます。」

就職して33年間勤務させていただき、よき先輩、後輩に支えて頂いたおかげであると感謝しています。この表彰をうけたことを胸に健康に気を付け職場の仕事に励み、医療に貢献したいと思います。」

田上さんは、透析室勤務以降は中材手術室に所属し、外科、脳外科、整形外科、循環器、眼科、泌尿器科等々多種多様な手術が出来るように、また夜間や緊急にも応じる体制も構築され、年間1000件以上の手術をこなす手術室の室長として種子島の救命医療を支えて来られました。心身ともに健康で体力も必要とされる部署です。これからもよろしくお願い致します。

外来看護師長兼部長補佐 園田 満治

園田さんは、園田家の長男として種子島にUターンしたとお聞きしております。当院勤務後は准看護師免許、看護師免許を取得し、看護師長、DMAT隊長補佐、看護部長補佐として常に新しいことに挑戦する姿を知らしめてくれる師長さんです。行政とも顔の見える関係性を構築しており、新型コロナ感染症対応もICTとともに種子島医療センターの体制構築に大いに貢献していただきました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

外来看護師 大谷 清美

大谷清美さんは、長きにわたり、当院外来看護師として勤務していただいております。主に皮膚科や耳鼻科を担当し、鹿児島市内から派遣される非常医師が診療しやすい環境を整えて外来診療を進めてくれております。忙しい時にも冷静に笑顔を持っててきばきと采配する姿には脱帽です。これからも外来看護の顔としてどうぞよろしくお願いいたします。

種子島医療センターでの研修を終えて

済生会松山病院研修医2年目 浦島 大介

種子島医療センターでの3週間の研修の中で様々な貴重な経験をさせていただきました。整形外科で研修を行った中で一般外来や救急外来はもちろんのこと、入院患者さんとそのご家族へのICをする機会をいただくだけでなく、手術の際には初めての執刀医も務めさせていただきました、整形外科志望としての大きな1歩を種子島にて歩むことが出来ました。

自分が勤務している済生会松山病院と異なる点としては、リハビリテーション病院への転院がないという点です。済生会松山病院では急性期の治療・リハビリを行いその後はリハビリテーション病院に転院することが多いのですが、種子島医療センターでは地域包括ケア病棟だけでなく回復期病棟も備えているため術後リハビリテーションを院内で長く行うことが出来る点で素晴らしいと感じました。

また、救急外来を行う際には常勤の放射線読影医がいなかったため緊急性のある疾患は自分で読影できなければならないという点で、より責任感を持って診療に臨むことが出来るようになったと感じています。

また、放射線画像オーダーなどについても、放射線技師の方々から色々なアドバイスをいただきとても勉強になりました。休日などは趣味である釣りに没頭し種子島の豊かな自然を満喫することができました。

今回の種子島医療センターでの研修では、将来進もうと考えている整形外科について深く学ぶことができただけでなく医師としての責任感を強く自覚することができました。

高尾院長、田上理事長をはじめとして指導していただいた前田先生、三重先生、里中先生、そして各スタッフの方々にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

北海道大学病院研修医2年目 吉川 栞

種子島で過ごした1か月は、私の研修生活の中でかけがえのないものとなりました。一番は人との出会いです。この病院の方々には皆さん、右も左も分からない私に声を掛けてくださいました。これまで、チーム医療ではコメディカルとのコミュニケーションが大切、と言葉では教わってきましたが、この病院に来て、それを体感しました。医学的な知識や技術だけでなく、人との関わり方もこの研修生活で学ばせていただきました。

技術という点では、初めて手術の執刀を任せていただきました。腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術は、私には身に余る手術で、実際は手も足も出ませんでした。術式や操作について勉強したつもりでしたが、つもりでは意味がない、実際にできないと意味がないと感じました。技術は手を動かさないと身につかないし、動画を見ただけではできるわけがありません。これまでの手術へ参加姿勢、執刀に向けた準備の仕方など反省点は数え切れません。この経験を今後の研修生活、医者人生に活かせるよう、努力して参ります。

救急外来では、種子島特有の症例を見ることができました。マムシ咬傷、ネコ咬傷、交通事故が多いなど、地域性を感じました。鮫島先生をはじめ多くの先生にご指導いただき、救急対応への不安が大きかった私も少し成長できたように思います。

また、救急外来に来る患者さんのほとんどが当院のかかりつけであり、その点では診療しやすく感じました。都市部では、患者さんが疾患ごとに複数の病院に通院しており、既往歴を聞くだけでも一苦勞です。診療のしやすさとともに、島民の命がこの病院にかかっているのだと思うと、身が引き締まる思いでした。

地域医療は限られた医療資源の中で診療を行うため、制限が大きいイメージでした。しかし、当院では島内で完結する治療も多く、当院で治療可能か否かを判断することも地域医療において重要であると学びました。

高尾院長、田上理事長をはじめとしてご指導いただいた濱之上先生、出先先生、鮫島先生、そして各スタッフの方々にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

済生会松山病院研修医 塩出 涼

今回の研修は、外科をローテートさせていただきました。濱之上先生、出先先生、鮫島先生の指導のもと、病棟や救急外来、手術を数多く対応させていただきました。救急ではマムシ咬傷を3例経験し、実際の切開排毒もさせていただき、基本的な初期対応や投薬はマスターすることができたと思います。内科や外科、整形外科の先生に救急外来へ呼んでいただき、外傷やAKI、腹痛、CPA、胸痛など様々な疾患の対応をしました。

手術ではLECSや開腹結腸切除の手術を助手として参加させていただき、最終週には、腹腔鏡下虫垂切除術の執刀、翌日には上腕ポート増設術を執刀させていただきました。実際に自分で体位や固定、ポート位置、鉗子の選択などを考え、手術を組み立てさせてもらいました。虫垂炎は、2時間以上時間がかかってしまいましたが、無事終了できました。自分の病院でも経験したことのないような経験をさせていただき、研修医生活で最も能動的に動き、自分で考えて行動した期間だったと思います。本当に貴重な経験を種子島医療センターでさせていただきました。一生忘れない手術になったと思います。

鮫島先生には、手術でも処置でも、救急外来でも、まずは自分で何をすべきか、どんな道具が必要か判断し自分で指示を出すように指導していただき、まずは自分で対応し、それを後ろで見守っていただき、その後に詳細なフィードバックをしてもらえて、今まで出会ったことのないほど、素晴らしい指導医に出会えたと思います。出先先生とは当直にも入らせていただき、夜間の救急外来も指導を受けながら対応することができました。濱之上先生にも、非常にアカデミックな内容を指導いただき、外科系に進む者としての心意気を学びました。

先生方だけでなく、病院スタッフの方々も明るくてアットホームで優しい人ばかりで、外来含め病棟でも本当に楽しく働くことができました。食堂のご飯もとても美味しく、もう朝昼晩ご飯を食べられないと思うと、寂しくてたまりません。

外科の先生も、土日は種子島を楽しむようにと、休みにしていただき、同期4人で種子島のいろんな所へ観光しに行きました。存分に種子島を満喫できたと思います。また個人的に家族で旅行しに来たいと思いました。

福岡大学研修医2年目 中村 亮介

自分は7月1日から30日の1か月間、種子島医療センターの消化器内科で研修させていただきました。

研修の内容としては病棟業務だけでなく、救急車の患者の初期対応や新患の外来患者を診させていただきました。その他にも、胃カメラをやったり、逆に自分の希望で胃カメラを入れてもらったりと、種子島医療センターでは大学病院では体験できない経験をさせていただきました。その他にも、田上寛容先生の訪問診療の同行させていただいたり、小学生の遠泳大会では泳ぐ前の健康診断や漁船に乗って小学生を見守ったりと地域ならではのイベントに参加しました。

休日は研修医の同期と浦田海水浴場でシュノーケリングやカヤックをしたり、宇宙センターやカフェ巡りをしたりと種子島を満喫しました。種子島の自然は本当にきれいで、この1カ月は忘れられない夏になりました。

自分は消化器内科に入局する予定です。種子島医療センターでは自分の専門の科を超えて治療する必要が多々あり、地域では総合診療科の部分も求められていると感じました。残りの研修期間は外科や消化器以外の内科を回りますが、今まで以上に積極的に勉強していこうと気が引き締まりました。

自分の無知でご迷惑をかけたことも多々あったと思いますが、種子島医療センターの方々には皆、親切に対応していただき、快適に研修を終えることができました。特に消化器内科の篠原先生と竹内先生には付きっきりで教えていただき、充実した研修にすることが出来ました。また、駒柵先生、鮫島先生、前田先生、三重先生、里中先生、日高先生は他科にも関わらず積極的に声をかけていただき本当に助かりました。1か月間ありがとうございました。また一緒に働く機会があればよろしく願いいたします。

鹿児島医療センター初期臨床研修医2年目 金城 多架良

2021年7月、私は種子島の地に生まれて初めて足をつけ、種子島医療センターの門戸を叩きました。初期臨床研修が始まって以来、初めて鹿児島市から離れた私は当初、離島という環境や、いよいよ始まる地域医療研修に、不安と期待が入り混じった感情を抱いていました。

研修を行う診療科は、元より外科を志していたこともあり、外科での研修を選びました。そして初日、「虫垂炎の執刀医をやってもらうから」と言われた時、今までカメラ持ちや第2助手程度しかやったことが無かった私は少々面食らいました。しかし、執刀医を行う経験など、研修期間においては唯一無二の好機であり、同時に期待感や嬉しさが込み上げてきました。

研修開始後は、瀆之上先生、出先先生、鮫島先生のご指導の下、手術の助手や病棟での業務に就かせて頂きました。先生方は私の質問や拙い手技、カンファレンス発表に対して、その度、非常に優しく助言をしてくださいました。救急外来や当直もあり、元の研修病院ではあまり診ることがない、外傷や整形外科的主訴の患者さんのファーストタッチをさせて頂きました。特にマムシ咬傷の症例は非常に衝撃的な経験でした。鮫島先生には処置や診療が一段落する際に、その都度フィードバックを頂き、自分の悪い癖や足りない知識、抜けて行った知識を見つめ直すことができました。

また、病院内の業務だけでなく、近くの廃校を会場にして行われたCOVID-19ワクチンの問診や、遠泳大会に出場する小学生の健康診断を行う医療スタッフなど、種子島の方々に携わる様々なイベントに派遣され、それらも地域医療にかかわるものとして、とてもいい経験になりました。

休日には、共に研修を行う仲間たちと共に、種子島宇宙センターや浦田海水浴場などの観光地、シーカヤックやシュノーケリングなどのアクティビティを楽しみ、種子島という島の美しさと楽しさを満喫することができました。わずか1ヶ月という短い期間、偶然にも一緒になった彼らは、私よりも医学的知見がずっと豊富で、彼らにも様々なことを教えて貰いました。

そして迎えた初執刀医の日は、患者さんの固定や術場形成など、今まであまり意識して見ていなかったことから意識して実践し、手術は先生方のご指導・ご助言を受けながら、重大なアクシデントもなく、何とか無事に終えることができました。

1ヶ月という短い間でしたが、種子島での地域医療研修は、私にとってかけがえのない経験と思い出になりました。この1ヶ月間で関わりを持った全ての方々に感謝いたします。

鹿児島医療センター研修医 竹原 雅宣

種子島には昨年12月に来る機会があり、その際にこの病院で研修したいと思ったのがきっかけでした。島の医療を手厚い指導のもと経験できることに魅力を感じ研修先に選びました。

研修診療科を決めさせていただき、私は兼ねてより興味があった脳神経外科で研修させていただくことになりました。自分で一から頭部外傷、脳梗塞、慢性硬膜下血腫の診療をする機会があり、今までとは違った視点で新しい学びがたくさんありました。特に脳神経外科は常勤の先生が一人しかおらず、自分一人で考えて進める医療の大変さをわずかではありますが体感することができました。これは島での医療に関わらず、外勤先の病院にて一人で決断するなど、これからの診療でよく出くわす場面だと思えます。ご指導いただいた駒柵宗一郎先生には感謝しきれない気持ちでいっぱいです。

研修診療科に関わらず、興味深い症例が来た際は先生方が快く私たち研修医を受け入れてくださり様々な症例に触れることができました。私はタイミングが合わずマムシ咬傷など島特有の疾患に出会うことができませんでしたが、医療資源が限られている、できる治療が限られているという島の医療の現場を体験することができました。

また、院内研修に限らずコロナワクチン接種や遠泳大会の健康診断など、地域医療に貢献する機会が多々ありました。院内だけでなく外で島民の方々と触れ合うことでより島の人達の人柄に触れることができたように思います。病院スタッフのお家にお邪魔する機会があり、子供たちが伸び伸びと成長し、自然に囲まれ新鮮な食材を食べ、星空が綺麗に見える生活が素直に羨ましく思いました。皆笑顔が多く朗らかなのが印象に残っています。

プライベートではたくさんのレジャーがあり、種子島の自然の美しさを体感しました。先程の遠泳大会では浦田海水浴場に行き、プライベートでも何回か泳ぎに行きました。7月なので冷たくなく人肌に優しく、コバルトブルーの海と透き通るような空が印象的でした。勉強するときはきちんと勉強し、遊ぶときは思いっきり遊ぶ、メリハリがある研修ができたと思います。

1ヶ月間の短い研修期間が終わり、このまま種子島で働きたいという気持ちがありました。尊敬する先生方の元を離れていくのはとても寂しい思いがあります。1ヶ月間と短い期間でしたが、高尾院長、駒柵先生を始め多くの先生方にご指導いただき大変ありがとうございました。またこの島に来る機会があったら、今よりずっと成長した医師として帰って来たいです。

済生会松山病院研修医2年目 小野田 杏奈

今回、種子島医療センターでの地域研修を経て、経験したことをいくつかに分けてまとめる。

まず、地域医療ならではの訪問診療について。一度、愛媛でも1件ほど回らせていただいたが、種子島医療センターでは4件ほど回らせていただいた。まず種子島は3週間住んでみて車がないと生活できないと覚えることが多かった。そのため、このような訪問診療のシステムはとてありがたいことなのだと思う。一緒にカルテを持っていけるわけではないので、ある程度患者さんの事前の把握は大切だし、実際に病院に戻ったら、処方などの作業をしないといけないので、患者さんそれぞれのことをきちんと考えることのできる医療だと思った。

次に、新型コロナウイルスについて。自分の病院では初期、受け入れをしておらず、大学病院でもカルテがロックされているため、カルテをみて勉強することができなかった。今回、実際に上の先生が治療をしているのを見て、とても勉強になった。種子島医療センターでは中等症Ⅰまでを入院管理しているがそれ以上に悪くなると、大学病院に搬送となる。初期の治療を確認できることも勉強になったし、実際にへり搬送になっている様子も出会ったので、非常に勉強になった。しかし、研修医としてコロナ関係で指導医の役に立てなかったのは残念である。

また、準夜帯での当直にも整形外科の先生と一緒に入って勉強させていただいた。脳出血などの救急らしい疾患と一緒に診たり、灯油の誤飲というような、島ならではの(島っぽいとは言えないかもしれませんが少なくとも私は初めて見ました)疾患に触れることができたのも、当直をした際のいい経験になりました。

最後に、種子島医療センターでは当直も日勤帯のトリアージも内科、外科関係なく行っている。もちろん、明らかに専門家が必要なケースでは依頼をかけるが、簡単なものであれば、自分で診る必要がある。内科の先生でも。簡単な外傷であれば、診察するというのは自分の病院では考えられないことなので、驚いた。愛媛に帰った時もこういった病院は全然あり得ることなので、今現在研修医として幅広い研修を行うのは大切なことであると思った。

濟生会松山病院研修医2年目 中村 憲司

今回、種子島医療センターでは、整形外科をローテートさせていただきました。前田先生、三重先生、里中先生の指導の下、手術を中心に、救急対応・外来・回診などを一緒に診させていただきました。手術では大腿骨転子部骨折・大腿骨頸部骨折・大腿骨顆上骨折・橈骨遠位端骨折など多くの術野に入らせていただき、整形外科的なcommon diseaseを一通り経験する事ができました。また、橈骨遠位端骨折のプレート固定術と大腿骨転子部骨折のガンマネイル挿入術のそれぞれ執刀をさせていただき、大変貴重な経験になりましたし、整形外科医としての一步を種子島の地で踏み出せたと思います。実際に執刀するとなると、術前に様々な計画をしますが、手術中は思い描いたとおりにいかないことも多く、指導医の先生に頼ってばかりでしたが、医師としての責任や自覚をより強く持たなければいけない事を痛感しました。

また、三重先生と一度当直に入らせていただき、股関節の脱臼、胸水による呼吸困難、交通外傷など様々な患者さんの対応をしていただいたのですが、一番勉強になったこととしては、同じ症例の方でも年齢や家族構成、育ってきた環境や性格などその人独自の様々な背景を考慮し、杓子定規的な医療ではなく、出来るだけその人のニーズにあった治療介入やICなどを行うことが重要であると学びました。今後も出来るだけ患者さんに寄り添える医療を行える医師になりたいと今回の研修で強く思いました。

今回はCOVID-19がちょうど蔓延しており、種子島にも緊急事態宣言が出ていた中で、なかなか院外での交流などは出来ませんでした。感染予防に注意しながら種子島宇宙センターや千座の岩屋など観光地には行くことが出来ましたし、仕事終わりにはランニングや遊泳なども出来、種子島の自然は堪能することが出来たと思います。

3週間という短い間でしたが、整形外科の先生をはじめ皆様優しく接していただき大変感謝しております。種子島医療センターでの経験を生かして今後の糧にしていきたいと思っております。このような貴重な機会を作っていただきありがとうございました。

鹿児島医療センター研修医2年目 碓 知樹

今回1か月間消化器外科をローテートさせて頂きました。濱之上先生、出先先生、鮫島先生の指導の下、手術を中心に、救急・外科外来の対応や病棟管理などを経験しました。また何度か高山先生の指導の元で麻酔をかけさせて頂きました。コロナ禍で手術件数は少なかったものの、PICCポート留置は基本研修医主体で執刀させて頂きました。事前イメージトレーニングをしていても実際執刀医としてオペ室に立つと思う通り動けず歯がゆい思いもしましたが、今後の医師人生でも役立つ貴重な経験を積めたと感じます。また一緒に外科をローテートした新村先生が腹腔鏡下ヘルニア根治術の執刀をし、私が麻酔医として共に手術を行った事は今後忘れることはないと思います。

救急外来ではマムシ咬傷こそ診られなかったものの、ムカデ咬傷やクモ咬傷、猫咬傷など多くの動物咬傷を経験できました。鮫島先生が後ろで監督している中、研修医主体でファーストタッチさせてもらい、一通り診察、処置が終わってから必ずフィードバックを頂けたのが大変勉強になりました。一通り診察が終わるまであまり口を挟まずに見ていただけだったので、1人に対応するいい機会になったと思います。

当直では里中先生とご一緒させて頂き、頭部外傷、交通外傷、急性腹症などを経験できました。市内の病院と違い放射線技師や検査技師が常駐しておらず、今まで経験してきた当直との違いを感じました。そこにある物資、人員でやっていく必要があり地域医療の難しさを体感しました。

コロナ禍で種子島観光や先生方と食事会などができなかったのは心残りでしたが、研修としては充実した日々を送れました。外科の先生方を中心に皆様に優しく接して頂き大変感謝しております。1か月と短い期間でしたが本当にお世話になりました。

鹿児島医療センター 初期研修医2年目 新村 和也

1か月間外科で研修をさせていただき、主に救急外来や一般外来患者の問診・診察、病棟管理や手術業務などに携わらせていただきました。

救急外来や一般外来では島特有の虫咬傷や普段の研修先ではあまり見ることのない、いわゆるcommon diseaseの患者様の診察に携わらせていただき、非常に新鮮かつ貴重な体験をさせていただくことができました。救急外来や一般外来患者では、問診・診察、簡易な処置や手技など研修医でできる範囲のことについては全て一任くださり、問診や身体所見の取り方やそこから得られた情報を解釈しどのような疾患を想定するか、どのような検査や処置が必要か、また手技に際しては事前にどのような準備が必要で手技の手順はどうか、手技を行った後のフォローアップはどのように行うのがよいかなど、自分で考えて動く習慣を身に付けることができました。診察や処置が終わった後は必ずフィードバックを頂き、自分の行ったことや考えていたことは医学的に妥当であったか、間違っていた場合どのようにすればよかったかなどを振り返ることができ、臨床的な思考能力も養うことができました。

月末には鼠径ヘルニアの手術を1件執刀医として担当させていただきました。手術前は指導医の先生にお借りした手術書や手術動画などをみて入念に予習をして臨みましたが、いざ実際に手術を行うとなると鉗子操作が思うように動かず全然イメージ通りに進みませんでした。指導医の先生のサポートを受けながら何とか完遂することができましたが、手術の難しさを痛感するとともに、外科の世界の奥深さや面白さを肌で感じる事が出来ました。

種子島医療センターでの研修は1か月と非常に短い期間でしたが、非常に内容の濃い充実した時間を過ごすことが出来たと思います。指導していただいた先生方をはじめ、研修をサポートして頂いた病棟スタッフ、事務員の方々にこの場を借りて御礼申し上げます。

鹿児島医療センター研修医2年目 今辻 大貴

故郷、鹿児島市から南へはるか115キロメートル。種子島での1ヶ月の地域医療研修が終わりました。長かったようで短かったこの1ヶ月を振り返ると充実した研修の日々が思い出されます。

研修診療科は脳外科に決めました。理由としてはこの3万人が住む島で脳外科医は一人しか常勤されていないと伺ったからです。すぐに高度な医療施設にも運べるわけでもない離島で、脳卒中という重大な疾患にいかに対処していくのかを学べると考えました。結果として、この1ヶ月の間に多くの脳梗塞、脳出血を経験しました。島でどこまで治療に踏み込めるか、どこからヘリ搬送を選択するのかなど、離島ならではの医療を実感することができました。夜間救急でもすぐにあらゆる検査ができるわけでもなく、本当に必要な検査のみを行う必要性を学びました。また、マムシ咬傷など島特有の救急も体験することができました。

そして多くのスタッフや患者さんと関わったり、美味しい食べ物や綺麗な風景を観光したりすることで、島の文化や風土を知り感じ取りました。

この種子島で学ばせて頂いた多くのことを、今後の医師としてのみならず人生の糧として活かせるよう励もうと思います。1ヶ月間ありがとうございました。

鹿児島医療センター研修医2年目 本田 健

今回種子島医療センターでは糖尿病内科を回らせていただきました。理由としては自分自身糖尿病内科への入局を決めていたことと今年から糖尿病内科が常勤になり離島でどのような診療が行われているか興味があったからです。教育入院を始め他科の患者様の併診、外来や負荷試験も経験させていただきました。初めは勉強不足で血糖管理も難しかったですが久保先生のご指導のもと様々な症例を通じて成長することができました。糖尿病の方だけでなく一般内科としての患者様も多く離島での医療を身にしみ感じ、また人工呼吸器管理している患者様を通じて呼吸器設定についての理解も深めることができました。救急外来でも鹿児島医療センターでは経験できない外傷なども経験でき充実した1ヶ月でした。

コロナウイルスの影響で閉まっている店も多かったですが、その中でも休みの日には色々な観光地へ行ったり、サーフィン、カヤック、SUPといったアクティビティで遊んだり種子島を満喫することができたと思います。

最後になりますがご指導いただきました久保先生はじめ諸先生方、病棟・外来のスタッフの方々、毎日美味しいご飯を作ってくくださった義福の方々、お世話になった方々全てへ感謝申し上げます。

福岡大学病院初期研修医2年目 益雪 凌介

1ヶ月間、外科をローテートさせて頂きました。濱之上先生、出先先生、鮫島先生の指導の下、病棟管理、救急外来、手術などを経験することが出来ました。手術では勉強不足な自分に手術手順や解剖学的所見等を丁寧に教えて頂きました。また助手としてだけではなく、上腕ポート造設では執刀医としての経験をすることが出来ました。執刀医を初めて経験し、自分で手術を組み立てないといけないので考えなければいけない事が多く、今までと手術の見方が大きく変わりました。

また病棟では患者に対しての接し方、考え方を学ばせて頂きました。一人ひとりの患者への向き合い方、今後の方針の考え方などを患者とコミュニケーションを密にとって治療していく鮫島先生の姿に自分の理想の医師像を感じました。

救急外来では鮫島先生のサポートの下、研修医主体でファーストタッチを行いました。看護師との連携がうまくできず時間をかけてしまいました。普段受け身になって考えていることが多く、能動的に考え、動く事の大切さ、例えば事前に役割分担を行っておくなど準備の必要性を肌身で感じました。またマムシ、ムカデ咬傷など島ならではの疾患を経験し、対処の仕方や治療方針を教わりました。

また皮膚科の外来がある日は、外来見学や手術のサポート等を行いました。大学病院と市中病院では、診る疾患が異なり初めて診る疾患も多くありました。処置では植皮部の採皮を任せて頂くなど、普段出来ないような貴重な経験を積むことができました。

休みの日にはマングローブカヤックやサーフィンなど、福岡では体験できない自然を大いに楽しみました。宇宙センターや食事施設が休業していたのは残念でしたが、種子島医療センターのスタッフの方たちにとっても優しく接して頂き、研修内容としては十分満足した日々を送ることが出来ました。1ヶ月と短い期間ではありましたが本当にお世話になりました。

福岡大学病院初期研修医2年目 大串 秀仁

1か月間整形外科をローテーションさせていただきました。前田先生、三重先生、里中先生に外来診療、救急対応、手術計画の立て方、術中の手技をご指導いただき研修医生活で最も自分の幅が広がった1か月間でした。

外来診療では、患者の呼び入れ方から診察方法、整形外科特有の処置（包交、縫合、抜糸、関節穿刺）を学ばせていただきました。3年目から実際に外来診療を一人でする場面が出てくると思いますが、この経験を忘れずに福岡に持ち帰ります。

術場では豊富な種類の骨折や変性疾患に携わることができ、大腿骨転子部骨折は3例も執刀させていただきました。執刀医として執刀するのは1年半の研修生活の中で初めての経験であり、戸惑うことや、手術道具の使用に難渋する場面も多々ありましたが、先生方並びに手術室内のスタッフの協力があり無事に終えることができました。改めて、手術の難しさや面白さを知ることができ、もっと腕を磨かなければとも痛感させていただきました。来年度からは整形外科を志望していますが、整形の先生方から学んだノウハウを今後も活かしていきます。

救急対応では、初日から足に釘が刺さった人の処置や、骨折診療、COPDの急性増悪、外傷の処置など数多くの症例・疾患を経験することができました。

訪問診療では、種子島に点在する住居を周り、患者の様子や実際の診療行為を見ることができました。また、どの患者の家でもその家族のサポートや温かみを感じることができ種子島の人々の優しさや思いやりを感じることができました。

1か月間という短い間ではありましたが、種子島の医療から福岡には学ぶことができない多くのことを学ぶことができました。福岡に帰ってもこの経験を糧に更なる精進を積んでまいります。

お世話になった先生方、外来・手術室のスタッフ並びに飯田さんをはじめ事務の方々には厚く感謝申し上げます。種子島のすばらしさを家族や友人に紹介したいと思います。

北海道大学病院研修医 玉槻 大輔

種子島医療センターでは、内科を選択し1ヶ月間研修をさせて頂きました。島内から患者が集まる医療センターでは、主担当医としてたくさんの経験をする事ができました。

どうしても高齢者医療が中心になってしまう地域医療ですが、なかでも心不全合併例の多さに驚きました。呼吸器内科を志望している僕にとっては、心不全は切っても切れない関係にある病態であり、初期対応やその後のマネジメントについて自分で考えてやってみることは非常に有意義な経験になりました。また、COPDや肺癌末期の患者さんなど、僕の志望科の疾患にも数例関わる事ができました。時期的にマムシ咬傷などの離島ならではの疾患は経験できませんでしたが、CPA含め救急外来も数例経験できました。

種子島では、医療だけでなく余暇も経験する事ができました。新型コロナウイルス感染症の患者数が減少傾向となった10月、僕が島に来た当初より街が少しずつ活気づいていくのを感じました。島の観光地は一通り巡る事ができましたし、島の食べ物、島のお酒も楽しむ事ができました。ロケットの打ち上げを最高の気候条件の中見学できたことは一生の思い出です。

研修の最終日、残念ながら僕のいる間に退院できなかつた患者さん方に挨拶に回ったとき「寂しくなるね」「先生によくしてもらってよかった」などの言葉を頂けた時は、わずか1ヶ月ではありましたが、やりがいを感じる事ができました。また、自分は内科疾患を持つ患者さんの全身のマネジメントをしたいのだ、と再認識する事ができました。

種子島での1ヶ月間は、僕のこれからの医師人生にとってかけがえのないものになったと感じております。1ヶ月間ありがとうございました。

北海道大学病院研修医 西野 一輝

10月の1ヶ月間、種子島医療センターの外科で研修させて頂きました。来年から外科を専攻する私にとって、外科を回る最後の期間でした。大学病院での研修では難度の高い手術が多かったのに対して、市中病院での研修はcommon diseaseが多く普段とは違う研修を送ることが出来ました。来年以降に実際に自分が執刀するであろうヘルニアや虫垂炎、胆石症などの手術に入らせて頂いたのはとても勉強になりました。自分が執刀するつもりで、手術の内容を勉強し、周術期の流れも理解を深めることが出来ました。それ以外にも肝臓癌や大腸癌や臨時手術もあり、様々な手術の勉強をすることが出来ました。また腹部エコーやCVポート抜去なども実際に経験させて頂きました。分からないことも多くありましたが、その都度外科の先生方の手厚いご指導のお陰で困ることなく研修することが出来ました。

地域研修という点では、島民が島で手術を受けられることはとても安心感が得られると思えました。患者さんと話をする中で方言を聞き取ることに苦労しましたが、少しではあります。が徐々に聞き取れるようになり気候や生活や文化の違いを学ぶことができました。診療所に行ったり、往診も見学させて頂いたりして種子島の生活を実際に感じながら医療を学ぶことが出来ました。

仕事以外では一緒に回っていた研修医と海でダイビングをしたり、地元の居酒屋で種子島の焼酎を飲んだり、種子島を満喫することが出来ました。そして何よりも、今月はロケットの打ち上げを見たことが一番印象に残っています。もう二度とロケットの打ち上げは見られないと思うので、とてもいい経験をすることができました。

最後に1ヶ月間ご指導頂いた、瀆之上先生、出先先生、富田先生を始めとして病院の職員の皆様方、本当にありがとうございました。

鹿児島医療センター研修医 斧淵 奈旺

11月の1か月間整形外科をローテーションさせて頂きました。前田先生、三重先生、里中先生に救急対応、手術計画の立て方、術中の手技、術後管理、リハビリテーションなどをご指導いただき研修医生活で自分の幅が広がった1か月間でした。研修として整形外科はまだ経験していなかった中、さまざまな種類の疾患を経験させて頂きました。救急や訪問診療では島の拠点病院としての特質や治療後を見据える姿勢なども学ばせて頂きました。

仕事以外では一緒に回っていた研修医と海でダイビングやロケットの発射を見に行くなどはできませんでしたが、地元の居酒屋で種子島の食べ物、島のお酒を飲むなど種子島を満喫することが出来ました。

1か月間という短い期間ではありましたが、種子島の島の地域医療として多くのことを学ぶことができました。

お世話になった先生方、手術室・病棟・外来・訪問診療の医療専門職、事務の方々には厚く感謝申し上げます。

鹿児島医療センター研修医2年目 中馬 直人

種子島で過ごした1か月は私の研修生活の中で、かけがえのないものとなりました。一番は人との出会いです。この病院の方々は皆さん、右も左も分からない私に声を掛けてくださいました。これまで、チーム医療ではコメディカルとのコミュニケーションが大切、と言葉では教わってきましたが、この病院に来て、それを体感しました。医学的な知識や技術だけでなく、人との関わり方もこの研修生活で学ばせていただきました。

脳外科の研修では今まで症例を上級医と一緒に診療する形がほとんどでしたが、入院患者をほとんど一人で管理させてもらい、今まで気が付かなかったちょっとしたトラブル対応も経験でき、とても勉強になり力が付きました。

来年度より救急科を専攻する私にとってこの脳外科での急患対応や初期治療の方針を立てたりする経験は今後も生きてくると思います。ご指導いただいた駒柵先生も救急科としてこのような対応をするべきだと教えていただき大変勉強になりました。

休みの日は院長先生や地域の方とゴルフにも行き、とてもいい思い出になりました。これからもゴルフ頑張りたいと思います。

いろいろ至らない点はあったと思いますが、医局の先生方、事務の方々、病棟や外来のスタッフの皆さんのおかげで1か月楽しく研修ができました。この場を借りてお礼申し上げます。

福岡大学病院研修医2年目 榊 和哉

2021年11月1日～11月30日まで内科で田上寛容先生、松本松呈先生の下、研修をさせていただきました。病棟業務を始め、発熱外来、救急車対応など様々な経験を1ヶ月で行うことができました。内科全域の患者を担当しました。そのため、様々な科の疾患を経験することができました。福岡大学病院では科ごとに細分化された診療ですが、種子島医療センターは幅広い知識が必要であることを学びました。これが地域での医師の役割であるということがわかりました。

病棟業務では自分の考えた方針に対して先生方が丁寧に指導してくださり勉強になりました。大学病院とは異なり限られた資源で対応する難しさも学びました。また島医療特有であるドクターヘリを必要とする疾患も経験することができ、貴重な体験となりました。訪問診療では、島在住の方々の家、施設に赴き診療しましたがこれも貴重な経験となりました。この1ヶ月で学んだことを生かして来月以降診療業務を行なっていきたいと思います。

地域医療を学ぶだけでなく島の文化にも触れることができました。島の方々と食事処や観光施設等に関わりました。まず、高齢者の方は特に方言が強くなかなか言葉を理解することが難しかったです。島民の方だけでなくサーフィンなどを目的に住んでいる方もいて様々な方と関わることができとても刺激的な1ヶ月となりました。特に印象に残っているのは、僕が研修している間はロケットの打ち上げはありませんでしたが、種子島宇宙センターです。規模が大きく、宇宙、ロケットに関することが学べてとても良い経験になりました。

この1ヶ月様々な経験ができ、医療者として、人としてとても勉強になりました。本当に有り難うございました。田上先生、松本先生をはじめ駒柵先生、里中先生、三重先生、前田先生、など私に関わってくださった先生方本当に有り難うございました。

北海道大学病院研修医 2年目 片山 祐

一か月間大変お世話になりました。

私が種子島入りする日は飛行機、船ともに欠航になり、これから「離島」に行くのだということ強く認識させられました。精神科志望なので、脳機能の勉強がしたくて脳外科にて研修させて頂きました。駒柵先生に色々なことを教わり勉強になりました。脳卒中の治療とともに接遇面も細かく教えて頂きました。北大病院のプログラムでは他に奄美大島や徳之島などの島も選べたのですが、各病院からの資料を読んだところ、この衣食住環境が一番整備されていたので選ばせて頂きました。このようにいい加減なモチベーションだった私ですが、一か月間とても楽しかったです。勤務時間外でも一緒に研修した安松君と色々面白い体験が出来ました。義福の料理おいしかったです。かなり濃い一か月間でした。様々な方々のご尽力あつての研修であり、大変感謝しています。

今回の経験を活かし、良い医師になりたいと思います。今後とも何卒ご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

福岡大学病院研修医 安松 聖滉

種子島医療センターでの2か月の内科研修で多くの患者さんを担当させていただき、多くを勉強させていただきました。今までいた大学病院と異なりこちらは一人の医師が担当する患者さんの数が多いため、知識も経験も少ない私は不安でいっぱいでしたが、田上理事長、松本先生、久保先生、日高先生にご指導いただきながら何とか研修を終えることができました。医学的な知識や技術についてはもちろんのこと、医師としての患者さんご家族との関わり方についても多くを教わりました。

特に為になったことは、IC(患者さんご家族への説明)を自分でする機会を多くいただいたことです。今までの研修病院では指導医のICを後ろで見学することがほとんどだったのですが、この2か月で、患者さんの入院時の説明、急変時の説明などを指導医に見てもらいながらではありますが自分でさせていただきました。不安になっている患者さん、ご家族に対して病状を分かりやすく、正確に伝え、不安を取り除くことの難しさを実感しました。まだまだ未熟者ですが患者さんと真摯に向き合い、信頼関係を築ける医師になれるよう精進してまいります。

2か月間という短い期間でしたがとても濃密で有意義な時間を過ごすことができました。今後の医師人生に生かしていきたいと思っております。

ご指導していただいた先生方をはじめ、種子島医療センターの方々へ感謝申し上げます。